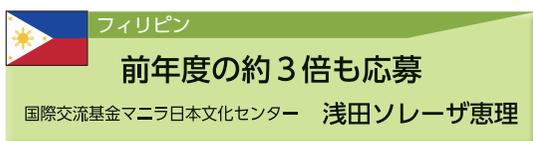


日本語スピーチコンテスト ～フィリピン、ラオス、カンボジアから



間もなく第50回目の開催を迎えるフィリピン日本語スピーチコンテスト。昨年度は新型コロナウイルス感染症拡大の影響で国内の対面イベントが軒並み中止となり、本年2月に予定していた当コンテストの開催も危ぶまれていました。けれど、このような社会状況だからこそ、フィリピンの日本語学習者を勇気づけたいと考え、当センター初のスピーチコンテスト完全オンライン化を決めました。

長く続いた外出規制のため私たち運営チームも本番前に1度も対面の打ち合わせができず、常に不安定なネット環境にハラハラしながら手探りで準備を進めていました。そして迎えたコンテスト公募の受付最終日には、何と前年度の約3倍もの応募書類が集まっていました。さらに、スピーチの多くが「オンラインでも日本語の勉強頑張っています!」「在宅時間が増えたので日本語学習を再開しました」など、コロナ禍でも日本語学習に前向きに取り組むみなさんの様子が伝わってくる内容で、審査員をはじめ私たちも大いに勇気づけられました。



本選当日はその様子を当センター Facebook などでもライブ配信。9人のファイナリストは職場や自宅からネット回線をつなぎ、数えきれないほど練習したであろうスピーチを表情豊かに披露しました。およそ3時間にわたるライブ配信は再生回数7600を超え、フィリピン国内だけでなく日本や他国から1200以上もの応援コメントが飛び交い、大盛況のうちに幕を閉じました。

フィリピンで長い歴史を刻む本コンテストをはじめ、これからも当センターは日本語の輪を広げる活動を続けていきたいと思えます。 ■

【お知らせ】

2022年2月19日(土)

第49回フィリピン日本語スピーチコンテスト2022

本選の様子を世界中へライブ配信。

皆さまからの応援コメントお待ちしております!



第18回目を数えるラオス日本語スピーチ大会は、日本語を学ぶ学生が日頃の学習の成果を発揮する場を提供すること、ラオスの人々に日本語や日本文化に興味をもってもらうこと、ラオスの日本語教育の現状を知ってもらうことを目的に毎年実施してきました。実行委員会は在ラオス日本国大使館とラオスの日本語教育機関の有志で運営されています。大会は3分スピーチ部門、1分スピーチ部門、そして朗読部門に分かれており、日本語を習い始めたばかりの小学生から、日本語を主専攻で学んでいる大学生までがレベル別に参加できるようになっています。



前年度の第17回大会はコロナウイルス感染拡大の影響で開催直前の中止を余儀なくされました。しかし、本年度はFacebookを使った無観客ライブ配信というかたちで3月13日に実施しました。ライブ配信は初の試みである上に、コロナウイルスのため様々な規制がありましたが、地方から中継で参加してもらったり、事前に録画したビデオを使ったりすることで大会を成功させることができました。そして、ラオス国内にとどまらず、ラオスに縁のある世界中の多くの方々にスピーチを見ていただきました。出場者にとっても大きな自信となったことでしょう。

ラオスの日本語学習者は年々増加傾向にあります。これからも、長い歴史をもつラオス日本語スピーチ大会を継続し、ラオスの日本語教育を一層盛り上げていきたいと思っています。■

カンボジア

オンラインで「視聴者投票」

カンボジア日本人材開発センター (CJCC)
国際交流基金 日本語講座調整員 熊谷 珠江

2021年5月23日、「第23回カンボジア人学習者による日本語スピーチコンテスト」(オンライン)がプノンベン大学外国語学部日本語学科、在カンボジア日本国大使館、カンボジア日本人材開発センターの三者共催で行われました。昨年は残念ながら中止を余儀なくされましたが、

今年は昨年の出場予定者13人がそれぞれの場所からスピーチを披露しました。



第1部(訪日が2週間以下の学習者が対象)9人、第2部(訪日が2週間以上の学習者が対象)4人は、1年の間に留学したり卒業したりと、大きく環境が変わった人が多かったようです。インターネットの接続状況などで差が出ないように、事前にビデオ収録してもらったスピーチを放映、スピーチ後の審査員からの質問のみ実際のやり取りとしました。オンラインの強みを活かすべく、今回初めて「視聴者投票」を行い、審査の一部に取り入れました。優勝は第1部がドゥ・ピセイさんの「外側を見ないで」、第2部はポール・ソワッターラーさんの「教科書に出ない日本語」になりました。

オンラインでの開催は初めてのことでした。新型コロナウイルス^{まんえん}蔓延防止のため集会在規制された状況の中、司会者2人と限られたスタッフのみが撮影会場に入り、他のスタッフや関係者はそれぞれの場所で、それぞれの役割をこなしました。小さなトラブルはありましたが、皆で補い合いながら無事終わることができました。YouTubeでの配信を多くの方々に見てもらうことができ、嬉しく思いました。2年越しのコンテストを盛況のうちに終わることができ、肩の荷が1つ下りたような気持ちがあります。■